

## 《代田の町家》の危機 文=長島明夫

初出：dezain.net | 2013年2月22日

再録：『建築と日常』No.3-4 | 2015年3月刊行



坂本一成の《代田の町家》（1976）が建つ土地が売りに出されている（goo 住宅・不動産）。

価格8700万円、土地面積130.63平米、坪単価220.17万円…。情報では売り物はあくまで世田谷区代田3丁目の土地であり、建築に関しては現況の注意書きとして「上物有り」とだけ記されている。とはいえその上物は築40年近くになって、もちろんそれなりに古びてきてはいるものの、竣工当初の床暖房もいまだ現役であり、住むことに大きな障害はないように思われる。住み続けてきた住人がこの家を離れるのは、また別の人生の理由によるようだ。筆者は2005年に取材でこの住宅を訪れたことがあるのだが（『住宅70年代・狂い咲き』エクスナレッジ、2006）、建築作品としてのあり方が尊重されつつ、丁寧に住まれている様子が印象に残っている。2点の写真はその取材の日に撮影した。

この住宅が建てられた1976年は、日本の現代建築史上、

きわめて重要な住宅の竣工が重なった年である。よく知られるのは篠原一男の《上原通りの住宅》であり、安藤忠雄の《住吉の長屋》、伊東豊雄の《中野本町の家》だろう。そして坂本一成の《代田の町家》は、その奥床しさゆえ知名度こそ前記の3作におよばないが、作品の価値は決して劣らない。それにしても仮にいま安藤忠雄の《住吉の長屋》が売りに出されたら、どれだけ大きなニュースになるか。というより、たとえ持ち主が替わるとしても、「goo 住宅・不動産」に「上物有り」の情報が載ることは考えられない。その建築の価値を共有した人同士での内々のやりとりが交わされるに違いない。いざとなれば建築家本人が購入するのではないかという予測もできる。けれども《代田の町家》は風前の灯火のごとく、現代の消費社会を漂っている。

結局のところ、家は個人の所有物である。他人がとやかく言えるものではないのかもしれない。よその家のことは分からない。もちろん自由に出入りすることはできないし、ごくまれに内部を見学できたとしても、それはあくまで見学であり、建築の本領が発揮されるべき日常のなかで十全に経験することはできない。あるいは、私は《代田の町家》の前を毎日行き来するわけでもない。もし《代田の町家》がなんらかのかたちで現存し続けることになったとしても、私はこの先、その家を訪れることも目にすることもなく死んでいくかもしれない。そんなとき、その家がこの世に存在するのとしらないのと、私にとってなにか違いはあるのだろうか。あるのかもしれないし、ないのかもしれない。しかし私はその違いがあるという世界に生きていたい。

きっと《代田の町家》が内包しているのもそんな世界なのだ。自分がいる以外の離れた場所の存在を想像し、その存在とともに自分が在るということ。

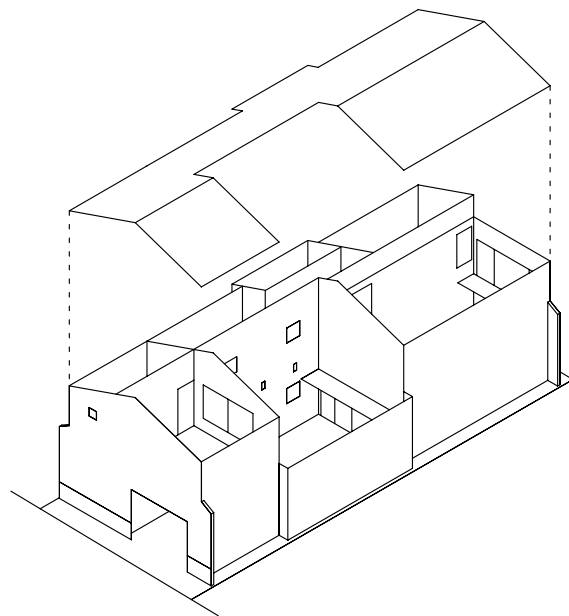
この住宅は、設計者が並列関係と呼ぶ、複数の室の関係によってできている。私はそのうちのどこかひとつの場所にしか身を置くことはできないが、そこでその場所自体の居心地の良さを感じるとともに、不思議と自分がいる以外の場所への想像が広がる。むしろその想像の広がり、自分がいる場所の居心地の良さをもたらしめているようにも思える。いま自分がいる場所がすべてではない。他の場所への想像は、必ずしも視覚だけによって直接的になされるのではなく、建築全体の抽象的な構成（室同士の関係）が観念として頭に浮かび上がってくる。個別の場所の身体性と、それを相対化し、建築全体のなかで位置づける観念性。このふたつのあいだに、この建築の体験は生成してくる。

言ってみれば、ワンルーム以外のあらゆる建物は「複数の室の関係によってできている」に違いないのだが、この《代田の町家》の特別な体験の背後には、そうした関係を際立たせる周到な設計がある。まず具体的なレベルでの室の組み合わせ方についていうと、たとえば2層吹き抜けのリビングは、隣接する中庭を介して視線がエントランスの車庫を抜け、前面の道路にまで至る。同時に2階の廊下ともガラスの窓で隔てられつつ、見上げる／見下ろすの関係がある。さらにリビング内には、大回りして2階の和室を通過でないと行けないデッキが張り出している。こうした空間の連続と分節の多様なあり方が、ひとつの場所にいながら複数の場所の遍在を知覚させることになる。

また、中庭や廊下といった、一般には場所の輪郭が意識されにくい空間も、その輪郭をより強く描くことで、一個の独立した場所として知覚されやすくなっている。中庭ならば、道路側からはぎりぎり乗り越えができないほどの高さでコンクリートのベンチが設けられ、領域を区切る。さらに上部もパーゴラが渡されて、屋根はないまでも直方体の輪郭が切り取られる。廊下ならば、慣習的な廊下としての機能や雰囲気は残しつつ、慣習よりもやや幅を広くとり、また柵を造り付けることで、場所としての存在感が高められている（このような中庭と廊下のあり方は、それぞれ「外室」「間室」として、設計者のなかで概念化されている）。

ところでこうした設計上の細かな操作は、ひとつひとつを取ってみれば、決してそれ自体が建築表現と呼べるような大それたものではない。《代田の町家》の室の組み合わせ方は、一般的なマンションや建売住宅のように、ステレオタイプ化した慣習や家族像（それらは商品価値にもなる）に則るわけでもなければ、経済的な合理性が優先されているわけでもない。と同時に、いわゆる作品としての建築表現を前面に出すわけでもない。それら外的な「意味」から離れたところで建築を組み立てることによって、そうした「意味」に回収されないまま、より純粹に体験者に建築の構成を知覚させる。

当時、《代田の町家》の価値を誰よりもすどく見いだした多木浩二が指摘するように[\*註]、こうした「意味」の消去は具体的な構成材をあつかう手つきにも見られる。この規模の住宅の仕上げとしては極めて異例な床の大理石は、それゆえに大理石という素材がもつ社会的な意味や、住宅の床はこうあるべきという無意識のうちの慣習的な意味を引き剥がし、床そのものを具体的かつ抽象的に知覚させる。同様に壁の縁甲板も、はじめから白いボードを使うのでもなく、白いクロスを貼るのでもなく、あくまで板に



ペンキを白く塗ることにより、意味までが漂白され、具体的な物として、抽象的な壁として、その存在が知覚される。こうした操作もまた、個々の場所の抽象度を高め、建築全体の構成を主体の観念のうちに浮かび上がらせることに寄与するだろう。

他人の所有物である《代田の町家》の存在が、そこから離れた場所にいる私の人生とどのような関わりをもつか。その問いと、《代田の町家》での複数の場所のなかに自分が位置づけられる体験とは、単に図式的に類似が指摘できるという以上に、あるいは結果的にそういう論理が立てられるという以上に、分かちがたくつながっている。ふたつをつなぐのは、自らが現代社会を確かに生き、震える魂でそれと向き合う坂本一成の思想である。《代田の町家》はその建築家の精神が形象化されたものとして、今のところ世田谷の住宅地の一面に建っている。

[\*註] 多木浩二「建築のレトリック1 『形式』の概念——建築と意味の問題」。坂本一成の《代田の町家》と伊東豊雄の《中野本町の家》の評論を含み、2作の発表と同じ『新建築』1976年11月号に掲載された。全5回の連載の初回。連載はすべて『視線とテキスト——多木浩二遺稿集』（青土社、2013）に再録されている。また《代田の町家》を論じた部分に限って、『多木浩二と建築』（『建築と日常』別冊、2013）にも転載。

[プロフィール] 長島明夫 | 編集者。個人誌『建築と日常』編集発行。別冊『多木浩二と建築』の刊行記念イベントとして、2013年5月に《代田の町家》で坂本一成と八束はじめによる対談「建築批評の内と外」を開催、動画記録をホームページで公開中。  
<http://kentikutonitijou.web.fc2.com/>